

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

Research on the Field of “Health” : Aiming at the Ideal Contents and Teaching Methods

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-02-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小山内, 弘和, 生野, 金三, OSANAI, Hirokazu, SHONO, Kinzo メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1388

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



領域「健康」の研究

— 内容と指導法について —

小山内 弘 和
生 野 金 三

I はじめに

平成 29 年に幼稚園教育要領が改訂された。改訂された幼稚園指導要領においては、「遊びを通しての総合的な指導」ということが示されている。幼児期の遊びをめぐって、「自発的な活動としての遊びにおいて、幼児は心身全体を働かせ、様々な体験を通して心身の調和のとれた全体的な発達の基礎を築いていくのである。その意味で、自発的な活動としての遊びは、幼児期特有の学習なのである⁽¹⁾。」としている。ここでは、自発的な活動としての遊びを重要視している。そして、幼児期における教育は、遊びを中核に据えて行うことの重要性も分かる。次いで、総合的な指導をめぐって、「遊びを展開する過程においては、幼児は心身全体を働かせて活動するので、心身の様々な側面の発達にとって必要な経験が相互に関連し合い積み重ねられていく。つまり、幼児期には諸能力が個別に発達していくのではなく、相互に関連し合い、総合的に発達していくのである⁽²⁾。」としている。ここでは、心身全体を働かせて活動する遊びを通して、幼児期の諸能力は、遊びを通して相互に関連して総合的に発達するとしている。加えて、「遊びを通して総合的に発達を遂げていくのは、幼児の様々な能力が一つの活動の中で関連して同時に発揮されており、また、様々な側面の発達が促されていくための諸体験が一つの活動の中で同時に得られているからである⁽³⁾。」とし、遊びの活動の中に、幼児の様々な発達を促す活動が内包されているとしている。

『幼稚園教育要領解説』では「具体的な指導の場面では、遊びの中で幼児が発達していく姿を様々な側面から総合的に捉え、発達にとって必要な経験が得られるような状況をつくることを大切にしなければならない。そして、幼稚園教育のねらいが総合的に実現するように、常に幼児の遊びの展開に留意し、適切な指導をしなければならない。幼児の生活そのものともいえる遊びを中心に、幼児の主体性を大切にする指導を行おうとするならば、それはおのずから総合的なものとなるのである⁽⁴⁾。」のように指摘する。以上から、遊びを中核に幼児の主体性を重要視して指導することが、おのずから総合的な指導になるとしている。特に、遊びの過程において、幼児は心

身全体を働かせて活動するため、心身の様々な側面の発達にとって必要な経験を相互に関連し合い積み重ねられていくとする⁽⁵⁾。

このようなことを踏まえ、本研究では、領域「健康」の内容と指導法について探ることを目的とする。幼稚園指導要領において「いろいろな遊びを通してしなやかな心と体の発達を促す」としている領域「健康」における遊び及び運動遊びを中心に探求を進める。

Ⅱ 領域「健康」の内容について

幼稚園指導要領の領域「健康」に示される遊びに関する内容について検討してみる。

表1は1989年から2017年までの幼稚園指導要領の領域「健康」で示された、遊びに関する内容を示したものである。

表1 領域「健康」の内容の変遷（遊びについて）

1989（平成元）年	1998（平成10）年	2008（平成20）年	2017（平成29）年
(2)いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。 (3)進んで戸外で遊ぶ。	(2)いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。 (3)進んで戸外で遊ぶ。	(2)いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。 (3)進んで戸外で遊ぶ。	(2)いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。 (3)進んで戸外で遊ぶ。

領域「健康」に示された遊びについての内容は、1989年以降、幼稚園指導要領は3回改訂されているが、「いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。」、「進んで戸外で遊ぶ。」から変更されていない。このことから、二つの内容が約30年に渡って重要視されていることが分かる。

ここでは、幼児期における遊びと運動の関わりについて触れている。身体的機能が著しく発達する幼児期においては、その機能を十分に使って、走ったり、跳んだり、投げたりといった運動的な遊びをすることが重要であるとしている。また、運動遊びにとどまらず様々な遊びに興味や関心をもち、自ら心を弾ませて取り組むことで、体も弾む。このような幼児を満足させる体験を積み重ねることは、身体の調和的な発達を促す上で重要な意味を持つのである。加えて、戸外での遊びの楽しさ気持ちよさを味わえる工夫が必要としている。そのためには、教師の果たす役割が重要であり、教師が幼児の興味及び関心が自然な形で戸外に向けられるようにし、幼児が自ら戸外の生活を楽しむようにしていくことが大切であると指摘する。このようなことから、幼児が体を動かす気持ちよさを感じることで、自ら体を動かす意欲や態度を育てることを願っている。

Ⅲ 「遊び」と「運動遊び」

1 「遊び」をめぐる

(1) フレーベルの遊戯論

フレーベルは、『人間の教育』の中で、「遊技することないし遊戯は、幼児の発達つまりこの時期の人間の発達の最高の段階である。というのは、遊技とは、すでにその言葉自身も示していることだが、内なるものの自由な表現、すなわち内なるものそのものの必要と要求に基づくところの、内なるものの表現にほかならないからである。遊技は、この段階の人間のもっとも純粋な精神的所産であり、同時に人間の生命全体の、人間およびすべての事物のなかに潜むところの内的なものや、秘められた自然の生命の、原形であり、模写である。それゆえ遊技は、喜びや自由や満足や事故の内外の平安や世界との和合を生み出すのである。あらゆる善の源泉は、遊技のなかにあるし、また遊技から生じてくる⁽⁶⁾。」と指摘する。そして、「自発的に、黙々と、忍耐強く、身体が疲れきるまで根気よく遊ぶ子どもは、またかならずや遅しい、寡黙な、忍耐づよい、他人の幸福と自分の幸福のために、献身的に尽くすような人間になるであろう⁽⁷⁾。」としている。ここでは、遊技中の子どもは生命の最も美しい姿ではないかとし、子どもの遊びの重要性を訴えている。

(2) デューイの遊戯論

アメリカの哲学者であるデューイは、『学校と社会』において、遊戯について、「遊戯は、むしろその全体性と統一性において、子どもの精神的態度をしめすものである。遊戯は子どもが自分のイメージと興味をなんらか満足できるような形に具現するさいにおける子ども全能力・全思想・肉体的全運動の自由な作用であり、相互作用である⁽⁸⁾。」とする。それは、消極的には、経済的圧迫、また成人の専門化された職業に付随する固定した責任感からの解放であり、積極的には、子どもの最高至上の目的は十分に成長しきることであるとしている。結果として、遊びは子どもの心理的態度であって、それは与えられた、ないしは規定された方式、恩物、遊戯、作業の規制の組み合わせに従う必要からの解放を意味する。デューイは、遊びを子どもの精神的態度の表出として捉えると同時に、フレーベルの恩物等を使った遊びを、形式化として批判している。その辺の事情をデューイは、「賢明な教師はたしかに、フレーベルが述べている諸々の活動（かれの著作『母の遊戯』その他）や、かれの弟子たちによってきわめて詳細に提示された諸々の活動から教訓を汲み取ろうとするであろう。だがしかし、賢明な教師たるものは同時にまた、遊戯の原理はかれにむかって、フレーベルらの提示したそうした活動を注意深く検討し、批判し、それらの

ものが真にかれ自身の子どもたちのためのものたりうるか、それとも異なった社会状態のもとに生活していた子どもたちにとって過去の時代において生きていたものにすぎないものかを決定することを要求するものであることを忘れてはならないであろう⁽⁹⁾。」と指摘している。デューイは、フレーベルによって提示されたものを、単に受け継いでいった場合は、すでにフレーベルの原理に忠実ではなくなっているということであるとし、それらのものを批判的に検討し、新しい見地から見直すことで、教育的に価値あらしめる根拠にまで進むことを望んでいるとしている。

2 「遊び」の教育的作用

遊びの教育的作用を考える際、遊ぶことそのことの意味から遊びが齎す心身の成長・発達の側面から考えることが重要である。

(1) 身体運動的発達

ビューラーは「機能遊び」について指摘する。子どもの遊びは、身体の様々な筋肉を使つての運動が極めて多く、例えば、走る、追い掛ける、滑り台を滑る、ブランコに乗る、木やジャングルジムに登る、ボールを投げる等、いずれの運動も多様な身体的活動を伴う。このような活動が、子ども自身の骨格や筋肉の発達等の体格の向上とともに、体力や機敏さの等の発達を促すものである。また、子どもの遊びの中には、鋏を使う、絵を描く、砂場で団子を作る、文字を書く等の活動も見られる。このような活動を通して子どもは手先の巧緻性を身に付けたり、感覚器官の鋭敏化を図ったりしている。

(2) 知的発達

ブルーナーは、『教育の過程』において、「どの教科でも、知的性格をそのままにたもって、発達のどの段階のどの子どもにも効果的に教えることができるという仮説からはじめることにしよう⁽¹⁰⁾。」としている。「仮説」という言葉を重要視しているが、それは「仮説を立てて検証する」という「学びの方法」そのものを身に付けることを重視しているからである。先のブルーナーの言葉の意味しているものの中には、行為化、遊び化することによって多くの知的内容が幼児にも伝達し得ることを内包している。遊びにおいて、子どもは具体物を通して、そして直接体験を通して様々な知識や技術を学んでいる。具現すれば、水や土で遊ぶことを通してそれらの性質を知り、物の名前を覚え、その使い方を学んでいく。また、夏の暑い日に浴びるシャワーの水は心地よいが、冬の寒い日に園庭で見付けた氷混じりの水は刺すような冷たさを感じるなど、季節によって感触や感じ方が異なることに気付く。このように、遊びの中には、物事についての知識、言葉、想像力、思考力との広範囲に亘る知識の発達に結び付く活動が含まれている。

(3) 社会性の発達

子どもは、幼稚園において他の幼児との関わりにおいて、これまでの母親と遊んだり、自分一人で遊んだりしたこととは、異なった経験をjする。子どもたちは、自分の感情や意志を表現しながら、ときとして自己の主張のぶつかり合いによる葛藤、つまり、けんかになった場合、主張すべきか、譲るべきか等の経験を通して互いに理解し合うという体験を学んでいくのである。こうして道徳性・規範意識の芽生え、つまり人間関係の基盤が育まれていくのである。これらと同時に、友達という様々な体験を重ねる中で、相手もまた欲求を考え、主張をもった存在に気づき、その気づきが友達との関わり方、人間関係の在り方を学ぶ契機となるのである。そして、その過程を通して、してよいことや悪いことがある分、ルールを守ることの大切さを学び、考えながら行動するようになっていくのである。

以上は、身体運動的発達、知的発達、社会性の発達等の三者にしほって遊びの有する教育的作用を概観したものであるが、遊びはこのような側面にとどまるものではない。

3 「運動遊び」について

幼児期の運動の実践が心身の発達に極めて重要であることから、平成24年に幼児期運動指針が策定された。幼児期運動指針では、「幼児期の運動は、一人一人の幼児の興味や生活経験に応じた遊びの中で、幼児自らが体を動かす楽しさや心地よさを実感することが大切であることから、幼児が自発的に体を動かして遊ぶ機会を十分保障することが重要である⁽¹¹⁾。」とし、体を動かす遊び、すなわち「運動遊び」の重要性を指摘している。

一方、現代の幼児の遊びとしては、体を動かすものが少なくなり、約2割の子どもは3歳くらいまでの時期に積極的に体を動かす遊びをあまりしていないとの指摘もされている⁽¹²⁾。この運動量の低下により、幼児期で動きの習得、体力・運動能力だけではなく、コミュニケーション能力にも負の影響を及ぼすことが危惧されている。幼児期は、児童期以降の運動発達の基盤を形成する。さらに、神経機能の発達が著しく、10歳頃までに大人の9割程度まで発達することから、体を操作する能力や危機回避能力を高める時期でもある⁽¹³⁾。このような幼児を取り巻く課題と状況を基に、幼児が主体的に体を動かす遊び、すなわち運動遊びを幼稚園の生活全体の中で確保していくことは一つの課題である。

幼児期運動指針においては、幼児期の運動遊びの意義として、多様な動きを身に付けるだけでなく、身体の発達、意欲の醸成など豊かな人生の基盤づくりになるとしている。その中で、①体力・運動能力の向上、②健康的な体の育成、③意欲的な心の育成、④社会適応力の発達、⑤認知的能力の発達、について以下のような効果が期待できるとする⁽¹⁴⁾。

(1) 体力・運動能力の向上

体力は人が生きていくために重要なものである。また、幼児期は、神経機能の発達が著しく、タイミングよく動くや力をコントロールするなどの運動を調整する能力が顕著に向上する時期である。これらは新しい動きの獲得や危険回避に関わる能力であり、幼児期にこの能力を高めることは、児童期以降の運動機能の基礎を形成するという点で大切である。

(2) 健康的な体の育成

幼児期の適切な運動は、丈夫でバランスの取れた体を育み、活動的な生活習慣の獲得とそれに伴う体調不良の予防、身体的・精神的疲労の軽減が期待される。

(3) 意欲的な心の育成

思い切り伸び伸び動くことにより、健やかな心の育ちも促す効果がある。遊びから得られる成功体験によって育まれる意欲及び有能感は、体を活発に動かす機会を増大させるだけでなく、何事にも意欲的に取り組む態度を育むことを期待させる。

(4) 社会適応力の発達

幼児期は、徐々に多くの友達と群れて遊ぶことができるようになり、その中で、ルールを守る、事故を抑制する、コミュニケーションを取るなど、協調性や社会性を養うことに繋がる。

(5) 認知的能力の発達

運動は状況判断から運動の実行まで、脳の多くの領域が使われる。その中で、状況把握や予測などの思考判断を行うことにより、運動制御機能や知的機能の発達を促進させることに有効であると考えられる。

これらの内容は、領域「健康」の「ねらい」、「内容」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」の健康な心と体等において触れられている。

また、幼児と健康のモデルカリキュラムでは、幼児の気になる姿や体のおかしさについて検討する機会を持つことが推奨されている⁽¹⁵⁾。幼児期は運動における基礎づくりの段階であり、量的な動きの多様化とともに、質的な動きの洗練化も重要な発達過程である。基本的な動きは、「体のバランスをとる動き」「体を移動する動き」「用具などを操作する動き」に分類される。幼児の気になる姿や体のおかしさについて気づくためには、その発達段階を理解することも必要であ

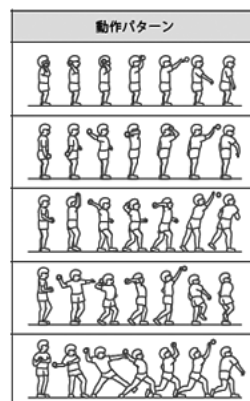


図1 投げる動作のパターン

る。

基本的な動きの一つとして「投げる動作（用具などを操作する動き）」の発達段階の特徴を考えてみる。図1は、3・4歳ごろから5・6歳における投げる動作のパターン1からパターン5である⁽¹⁶⁾。

パターン1：上体は、投射方向へ正対したままで、支持面（足の位置）の変化や体重の移動は見られない。

パターン2：両足は動かさず、支持面の変化は認められないが、反対側へひねる動作によって投げる。

パターン3：投射する腕と同じ側の足の前方へのステップの導入によって、支持面が変化する。

パターン4：投射する腕と逆側の足のステップがともなう。

パターン5：パターン4の動作様式に加え、ウィンドアップを含む、より大きな動作が見られる。

「投げる動作」の発達の特徴について触れたが、様々な基本的動作についても発達の特徴を把握しておく必要がある。

IV 領域「健康」の指導法について

1 領域「健康」の指導法についての基盤

領域の指導法の基本である「各領域のねらい及び内容」と「保育内容の指導法及び保育の構想」等の内容を見てみる。「各領域のねらい及び内容」をめぐるっては、以下の4つが重要であるとす

- 1) 幼稚園教育要領における幼稚園教育の基本、各領域のねらい及び内容並びに全体構造を理解している。
- 2) 該領域のねらい及び内容を踏まえ、幼児が経験し身に付けていく内容と指導上の留意点を理解している。
- 3) 幼稚園教育における評価の考え方を理解している。
- 4) 領域ごとに幼児が経験し身に付けていく内容の関連性や小学校の教科等とのつながりを理解している。⁽¹⁷⁾

1) では、幼稚園教育要領に示された幼稚園教育の基本を踏まえ、各領域のねらい及び内容を理解することを願っている。2) に「指導上の留意点を理解している。」とあるが、その例を見てみる。領域「健康」の「内容の取扱い」の3) に「幼児の興味や関心が戸外にも向くようにすること。その際、幼児の動線に配慮した園庭や遊具の配慮などを工夫すること。」とある。例えば、これは幼児の遊びのイメージ、興味や関心の広がりに応じて行動規範が広がることを考慮することである。具現すれば、室内でままごとをしている幼児がイメージの広がりとともに、「ピクニック行こう」と戸外に出ていくことがある⁽¹⁸⁾。この場合、幼児の心に寄り添いながら戸外にもままごとのイメージを実現できるような空間や遊具を準備していくことである。3) の「幼稚園教育における評価」とは、幼児理解に基づいた評価のことである。幼稚園においては、「行動の仕方や考え方等に表れたその子どもらしさを大切にして、一人一人の幼児が、そのよさを発揮しつつ、育っていく過程を重視する必要がある⁽¹⁹⁾。」その際、言葉で気持ちを伝えるとは限らないことから、教師が幼児の思いや気持ちを丁寧に感じ取ろうとすることが大切である。また、「小学校の教科等とのつながりを理解している。」とある。幼稚園と小学校では、子どもの生活や教育方法は異なるが、その変化に対応できるようになっていくよう、教師が適切な教育を行っていく必要がある。幼稚園は、学校教育の一環として、幼児期にふさわしい教育を行うものであり、その教育が小学校以降の生活や学習の基盤ともなることを踏まえることである。そして、子どもの発達と学びの連続性を確保するために、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)を手掛かりに、幼稚園と小学校の教師が共に幼児の成長を共有することを通して、幼児期から児童期へ発達の流れを理解することが大切である⁽²⁰⁾。

一方、後者の「保育内容の指導法及び保育の構想」をめぐっては、以下の5つが重要であると

- ① 幼児の認識、思考及び動き等を視野に入れた保育構想の重要性を理解している。
- ② 各領域の特性及び幼児の体験との関連を考慮した情報機器及び教材の活用法を理解し、保育構想に活用することができる。
- ③ 指導案の構造を理解し、具体的な保育を想定した指導案を作成することができる。
- ④ 模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けている。
- ⑤ 各領域の特性に応じた保育実践の動向を知り、保育構想の向上に取り組むことができる。⁽²¹⁾

ここでは、幼児の発達や学びの過程を理解し、具体的な指導場面を想定した保育を構想する方法を身に付けることを願っている。

具体的な指導場面を想定した保育の構想とは、具体的なねらい及び内容、環境の構成、教師の

援助等といった指導の内容及び方法を明確にすることである。具体的なねらい及び内容は、幼稚園生活における幼児の発達の過程を見通し、幼児の生活の連続性、季節の変化等を考慮して、幼児の興味や関心、発達の実情等に応じて設定することである。そして、環境の構成は、幼児が自らその環境に関わることにより様々な活動を展開しつつ必要な体験が得られるようにすることである。その際、幼児の生活する姿や発想を大切に、常にその環境が適切なものとなるようにすることである。幼児が望ましい方向に向かって自ら活動を展開していくことができるよう、教師の必要な援助が大切である。

以上は、5領域のねらいや内容を踏まえた上で、保育内容の指導法で実践すべき力を身に付けることを示した内容である。

2 領域「健康」の指導法における遊びの具体例

領域「健康」においては、自分の体を十分に動かそうとする意欲や態度を養うことを基本に、自分や自分の身の回り、さらには幼稚園生活について、自立的に行動していくようにすることも重要としている⁽²²⁾。また、友達とルールのある遊びを展開するときには比較的広い空間を確保するなど、教師は幼児が実現したいと思っていることを理解し、環境設定を考えることも必要とされる⁽²³⁾。ここでは、体を動かして、友達と遊ぶ中で、ルールを守ってその楽しさを感じ、興味をもって取り組むことを願っている。又、「幼稚園教育要領」で重要視されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「(1)健康な心と体」においては、「自己を十分に発揮して遊びや生活を楽しむ中で、体を動かす気持ちよさを感じたり、生活に必要な習慣や態度を身に付けたりしていく」とある。

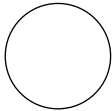


上記のことを踏まえ、以下においては【事例1】「転がしドッジボール」、【事例2】「ドーン！じゃんけん」での様相を見てみる。

【事例1】「転がしドッジボール」の遊び方について

①屋外で、転がしドッジボールを行う場合、幼児の人数に合わせてまず大きな円を描く。②内野と外野を決め、内野の幼児は円の中に、外野の幼児は円の外にそれぞれスタンバイをする。③外野の一人がボールを持ち、「はじめ」の合図で、円の中にいる幼児をねらって、ボールを転がす。④ボールを当てられてしまったら、外に出て外野として参加する。④最後まで残っていた内野の幼児がチャンピオンとなる。

①から④は、転がしドッジボールの遊び方である。この転がしドッジボールの遊びによって、幼児は簡単なルールを守って楽しむことや、ボールに当たらないように逃げるスリル、ボールを当てることができたときの嬉しさ、ボールに当たらないように逃げ切ったときの達成感等の楽しさを体験することができる。

【指導案】「転がしドッジボールの展開」

<p>子どもの実態</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもたちは、気の合う友達を誘って、二三人の集団でボール遊びを楽しんでいる。ボールを前に蹴ったり、投げたり、受け取ったりしてボール遊びを楽しんでいる。 	ねらい	<ul style="list-style-type: none"> 目標又は的に向かってボールを転がしたり、ボールをよく見てよけたりして楽しむ。 体を十分に動かしながら、ボール遊びの楽しみを味わう。 友達や保育者と一緒に遊ぶ中で、簡単なルールのある遊び（転がしドッジボール）を楽しむ。 自分なりに目的をもって、友達や保育者とボール遊びに取り組む。
	内容	<ul style="list-style-type: none"> 片手でボールを投げたり、転がしたり、よけたり、走ったりして体を十分に動かしながら、転がしドッジボールを楽しむ。 簡単なルール（ボールを転がして当てる、当たったら外に出て当てる人になる等）を理解し、守って遊ぶ。
環境構成	予想される幼児の活動	教師の援助
<p>・大きな円を描く。</p>  <p>・内野と外野に分れる。</p>  	<p>○転がしドッジボールについての話を聞く。</p> <ul style="list-style-type: none"> 内野と外野に分れる。 相手を見ながら片手や両手でボールを投げたり、転がしたりする練習をする（転がす術に取り組む）。 よける術に取り組む。 遊びのルールを聞く。 <p>○転がしドッジボールを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「当てよう」と自分なりに目的をもって挑戦する。 当てたり、取ったりした子どもが「やった」「うれしい」等の言葉を発しながら遊ぶ。 ボールを見てよけたり、ボールが来る方を振り返ったりして楽しく遊ぶ。 最後まで残った子どもが「よかった」等の言葉を発しながら遊ぶ。 <p>○転がしドッジボールの活動をまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「楽しかったよ」「おもしろかったね」「またやりたいね」等、遊びの満足感を口々に話す。 良い動きの様子、頑張りの様子等を認めたり、励ましたりして転がしドッジボール遊びを振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> ボールを転がしたり、ボールをよく見てよけたりして転がしドッジボールのゲームを行うことを確認させる。 ボールを顔に当てないように楽しく遊ぶように、ルールを確認させる。 ボールを転がすスタート位置決め、自分で挑戦する距離を考えながら取り組むことができるように援助する。 腕を伸ばしたり、大きく体を動かしたりして、体の動きを意識させながら、転がしドッジボールをさせる。 ボールをよく見て、よけるように援助する。最後までボールを見る気持ちを育てる。 苦手意識のある子どもに対しては、友達の動きをよく見るように援助する。 ボールを投げる姿やボールをよける姿等の子どもの動きを取り上げ、認めたり励ましたりして、転がしドッジボール遊びの楽しさを振り返らせる。そして、次のドッジボール遊びに結び付ける。

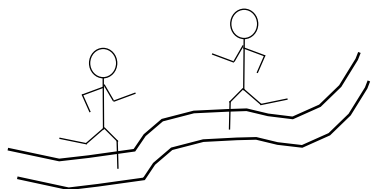
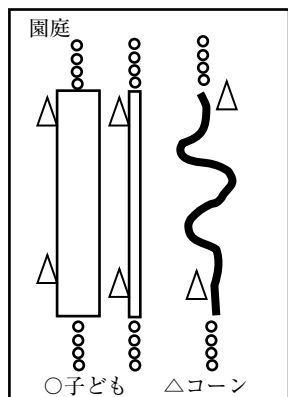
【事例2】「ドーン！ じゃんけん」の遊び方について

①屋外で、ドーン！ じゃんけんを行う場合、幼児が歩く、走るための線（直線、曲線、またはレーン）を描く。屋内で行う場合には、その環境にある線などを利用する、またはコーンなどを目標として置く。②2つのグループを決め、線の両端にそれぞれ一列にスタンバイをする。③「よーい、ドン」の合図で、両端にいる幼児一人ずつが、線の中央に向かって線に沿って歩いたり走ったりする。④線上で両がぶつかったところで止まり、お互いに「ドーン、じゃんけんポン」の合図に合わせて、じゃんけんを行う。⑤じゃんけんに勝った幼児はそのまま線に沿って進み、負けた幼児は線から外れ、負けたチームの次の幼児が線の端からスタートする。⑥上記を繰り返して、相手チームのコーンに先に到達したチームの勝利。

①から⑥は、ドーン！ じゃんけんの遊び方である。このドーン！ じゃんけんによって、幼児は簡単なルールを守って楽しむこと、思い切り走る爽快感ともに、止まる・曲がるなどの体を操作する楽しさ、じゃんけんでの自分、友達と協力してチームが勝利した時の嬉しさなどを体験することができる。

【指導事例】「ドーン！ じゃんけんの展開」

<p>子どもの実態</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもたちは、走る、止まる、曲がるなどの動きを取り入れながら、友達と鬼ごっこのような遊びを楽しんでいる様子も見られる。また、じゃんけんの勝ち負けを理解し、日ごろから遊びに取り入れている。 	<p>ねらい</p>	<ul style="list-style-type: none"> 元気に走ることで、体を動かす楽しさに触れる。 目印に沿って走る動きを通して、自分の体を操作しながら遊びを楽しむ。 相手にとの距離を考えながら、走り、止まる動きがスムーズに行えるように取り組む。 相手との調子を合わせながら遊び（じゃんけん）を楽しむ。 友達や保育者と一緒に遊ぶ中で、簡単なルールを理解しながら遊びを楽しめるようになる。
	<p>内容</p>	<ul style="list-style-type: none"> 目印となる引かれた線の端と端から線に沿って走る。 互いに出会ったところで止まり、じゃんけん、勝った方は進み、負けた方は交代となり次の人が端から走り始める。 相手の陣地までたどり着くまで繰り返し、体を動かす楽しさを味わう。 簡単なルール（相手と出会ったらじゃんけんをする、じゃんけんに勝ったら進む、負けたらその場からどいて、次の人が走り出す）を理解し、守って遊ぶ。
<p>環境構成</p>	<p>予想される幼児の活動</p>	<p>教師の援助</p>
<ul style="list-style-type: none"> 比較的大きな空間に、人数に合わせて、走るコース（レーン、直線や曲線）を描く。 	<p>○ドーン！ じゃんけんについての話を聞く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 指定されたコースを走ったり歩いたりして移動し、相手と会ったら止まってじゃんけんする、相手の陣地まで到達したら終了であることを確認する。 指定されたコースの中や線の上から外れないように、歩いたり走ったりすることを確認し、練習させる。



- ・二つのグループに分かれる。
- ・相手の人と出会ったら止まることを確認させ、練習させる。
- ・ルールを確認させる。(指定された場所を走る。相手と出会ったら止まってじゃんけんをする。じゃんけんで勝ったら、そのまま進む。じゃんけんで負けたら、本人は元の列に戻り、次の人は走り始める。相手の陣地まで行ったら勝ち)
- ・指定されたレーンを川や高いところのロープなどに例え、子どもたちが指定された場所を移動しようとする努力ができる状況を作り出すよう工夫する。
- ・走るコース(レーン、線)を歩く、走る練習をする(綱渡りの術に取り組む)。
- ・笛の合図に合わせて止まる練習をする(止まるの術に取り組む)。
- ・遊びのルールを確認させる。
- ドーンじゃんけんを行う。
 - ・「指定されたレーンからはみ出さないように走ろう」と自分なりに目的をもって挑戦する。
 - ・相手と出会ったところで、ぶつかることなく止まり、相手と調子を合わせてじゃんけんする。
 - ・指定のレーンを外れることなく移動できたり、じゃんけんに勝ったりした子どもが「できた」「うれしい」等の言葉を発しながら遊ぶ。
 - ・相手の陣地まで到達した子どもが「やった」「勝った」等の言葉を発しながら遊ぶ。
- ドーンじゃんけんをまとめる。
 - ・「楽しかったよ」「おもしろかったね」「またやりたいね」等、遊びの満足感を口々に話す。
 - ・良い動きの様子、頑張りの様子等を認めたり、励ましたりしてドーンじゃんけんを振り返る。
- ・相手と出会う場所でじゃんけんの調子を合わせるなど、ルールに従った動きができるように援助する。
- ・大きく体を動かして走ったり、じゃんけんで勝った負けたを大きな動きや言葉で表現させたりしながら、ドーンじゃんけんをさせる。
- ・苦手意識のある子どもに対しては、友達の動きをよく見るよう伝えたり、ルールの理解が難しい子どもにはきっかけの声掛けをしたりして援助する。
- ・指定されたレーンをしっかり走れた姿やしっかりと止まって調子を合わせてじゃんけんできた姿等の子どもの動きを取り上げ、認めたり励ましたりして、ドーンじゃんけんの楽しさを振り返らせる。そして、次の遊びに結び付ける。

Ⅵ おわりに

本研究では、領域「健康」についての内容および指導法について遊びと運動遊びの視点から検討した。領域「健康」の内容については、「いろいろな遊びの中で十分に体を動かす」、「進んで戸外で遊ぶ」の2項目について、改定に伴う変更がないことから、その重要性が明らかとなった。領域「健康」が遊びを重要視した内容であることを踏まえ、「遊び」及び「運動遊び」等の様相をそれぞれ探った。「遊び」の様相をめぐっては、「フレーベルの遊戯論」及び「デューイの遊戯論」等について触れた。前者の「フレーベルの遊戯論」においては、幼児の生活において最も美しい姿は、遊んでいる子どもの姿であるとし、ここでは、子どもの遊びを重要視する姿を訴えているとした。一方、後者の「デューイの遊戯論」においては、遊びを子どもの精神的態度の表出として捉えらるるとし、そしてデューイは、フレーベルの恩物等を使った遊びを、形式化として批判しているとした。このようなことを踏まえて、身体運動的発達、知的発達、社会性の発達等の三者にしばって遊びの有する教育的作用について概観した。「運動遊び」の様相をめぐっては、幼児期の運動の重要性と現状を踏まえ、「幼児期における運動の意義」及び「基本的動作」等について触れた。前者の「幼児期における運動の意義」においては、「体力・運動能力の向上」「健康的な体の育成」「意欲的な心の育成」「社会適応力の発達」「認知的能力の発達」等に触れ、これらの内容は、領域「健康」の「ねらい」、「内容」及び「(1)健康な心と体(幼児期の終わりまでに育ってほしい姿)(10の姿)」等において触れられているとした。

次いで、領域「健康」の指導法の基盤について探った。まず、「保育内容の指導法」の基本である「各領域のねらい及び内容」と「保育内容の指導法及び保育の構想」等の内容であるが、前者の「各領域のねらい及び内容」をめぐっては、4つの内容が掲げられ、そこでは幼稚園教育要領に示された幼稚園教育の基本を踏まえ、各領域のねらい及び内容を理解することが重要であるとしている。そして、幼稚園教育における評価の考え、各領域で幼児が経験し身に付けていく内容の関連性及び小学校の教科とのつながり等の理解も重要であるとしている。一方、後者の「保育内容の指導法及び保育の構想」をめぐっては、五者の内容が掲げられ、そこでは幼児の発達や学びの過程を理解し、具体的な指導場面を想定した保育を構想する方法を身に付けることが重要視であるとしている。

最後に、領域「健康」の指導法として、まず「転がしドッジボールの展開」、「ドーンじゃんけんの展開」を具体的に検討した。それは、子どもがボールを転がしたり、ボールをよけたりして楽しく遊び、ルールを理解しながら体と心を育てる内容である。

以上が本論の内容であるが、今後は、授業科目である領域（健康）およびその指導法において、

指導・実践を試み、その振り返りを通して、領域（健康）のあり様を探っていく。

《注》

- (1) 文部科学省, 『幼稚園教育要領解説』, フレーベル館, 平成 30 年, p.35
- (2) 同上書, 平成 30 年, p.35
- (3) 同上書, 平成 30 年, pp.35-36
- (4) 同上書, 平成 30 年, p.36
- (5) 同上書, 平成 30 年, p.51
- (6) フレーベル / 荒井武, 『人間の教育 (上)』, 岩波書店, p.71
- (7) 同上書, p.71
- (8) J・デューイ / 宮原誠一, 『学校と社会』, pp.141 -142
- (9) 同上書, pp.142 -143
- (10) 鈴木祥蔵・佐藤三郎 / J.S. ブルーナー, 『教育の過程』, 岩波書店 p.42

ブルーナーは、『教育の過程』において、「構造」及び「態度」等を重要視しているが、前者の「構造」をめぐるのは、「教科の構造を把握するというは、その構造とほかの多くのことがらが意味深い関係をもちうるような方法で、教科の構造を理解することである。簡単にいえば、構造を学習することは、どのようにものごとが関連しているかを学習することである。」とし、一方、後者の「態度」をめぐるのは、「それは、ある分野で基本的諸観念を習得するというは、ただ一般の原理を把握ということだけでなく、学習と研究のための態度、推量と予測を育ててゆく態度、自分自身で問題を解決する可能性にむかう態度などを発達させることと関係があるということである。ちょうど物理学者が、自然のもっている窮極の秩序と、その秩序は発見できるものであるという確信とに關して一定の態度をもっていると同じように、物理を勉強している若い生徒が、学習することがらを、自分が思考するとき役に立つものにし、意味のあるものにするような方法で組織しようとするならば、物理学者のもっている態度をいくらかでもそのまま自分のものにする必要がある。そのような態度を教育するためには、たんに基本的観念を提示する以上になにかが必要である。」としている pp.9-25。前述したブルーナーの「構造」及び「態度」は、平成 29 年改訂の「学習指導要領」で強調されている「見方・考え方」に対応しているように思う。今回の「学習指導要領」では、小学校から高等学校まで全ての学年において「見方・考え方」を働かせることを重要視している。この「見方・考え方」は、視点であったり、方法であったりするとしている。先に掲げた構造に「その構造とほかの多くのことがらが意味深い関係をもちうるような方法で」とあるように、ここでは相互関係などに着目する視点を重要視している。そして、後者の「態度」に「生徒が、学習することがらを、自分が思考するとき役に立つものにし、意味のあるものにするような方法で組織しようとするならば」とあるように、ここでは方法の重要性を指摘している。このようなことから、ブルーナーの『教育の過程』の内容と今回改訂の「学習指導要領」の記述とが響き合う関係にあることを窺い知ることができよう。

- (11) 文部科学省, 『幼児期運動指針ハンドブック』, サンライフ企画, 2013 年, p.49
- (12) 同上書, p.18
- (13) 運動が体と心の働きを高めるスポーツ保育ガイドブック～文部科学省幼児期運動指針に沿って～, 静岡産業大学, 静岡新聞, 平成 26 年, p.10
- (14) 日本発育発達学会, 幼児期運動指針 実践ガイドブック, 杏林書院, 平成 26 年, pp.38-39
- (15) 文部科学省, 幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究——幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える——, 保育教諭養成課程研究会, 平成 29 年, p.12
- (16) 文部科学省, 『幼児期運動指針ハンドブック』, サンライフ企画, 平成 24 年, p.13
- (17) 文部科学省総合教育政策局 教員人材政策所, 『教職課程認定申請の手引き』(令和 4 年度開設用), p.175

- (18) 文部科学省, 『幼稚園教育要領解説』, フレーベル館, 平成 30 年, p. 159
- (19) 同上書, pp. 121-122
- (20) 同上書, p. 92
- (21) 文部科学省総合教育政策局 教員人材政策所, 『教職課程認定申請の手引き』(令和 4 年度開設用), p. 175
- (22) 文部科学省, 『幼稚園教育要領解説』, フレーベル館, 平成 30 年, pp. 145-146
- (23) 同上書, p. 159

(提出日: 2021 年 9 月 15 日)